専教寺　仏婦だより



令和８年8月17日　発行

人生の本当の意味　―真実とは―

住職　釋　龍生

山陽新聞に、「アホウドリ」についての記事が掲載されていました。その記事によれば、アホウドリは伊豆諸島などで繁殖する海鳥です。1890 年代から 1900 年代にかけて、羽毛を目的とした乱獲によって激減し、一時は絶滅したものと考えられていました。しかし、今から約 75 年前に生存があらためて確認されて、その後長年にわたる保護活動が続けられた結果、現在では推定 11,067 羽まで回復したことが報じられていました。

一方で、「アホウドリ」という、“かわいそうな名”の由来にも触れていました。人間が近づいても、地上での動きが鈍く容易に捕獲できたことから、このような名前が付けられたといいます。この記事では、長年にわたりアホウドリの保護活動に携わってこられた某大学の名誉教授が、「アホウドリという名は、人間中心主義の思い上がりだ」と評しておられました。

人間とは、際限なく自分勝手な生き物だと思います。浄土真宗の宗祖の親鸞聖人(以下、宗祖)は、そんな人間の紡ぐ世間のあり方を、

> 煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもってそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします

と表現されます。この意味は、「私どもはあらゆる煩悩をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のように、たちまちに移り変る世界であって、すべてはむなしくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中にあって、ただ念仏だけが真実なのである」という意味です。世間や人間のあり方は、痴に際限なく自分勝手に生きること、それが人間の真実です。また誰しもが、等しく石ころのような小さな存在です。私たちは、自分にとって都合の良いもの、悪いものを合理的、生理的により分け、そこに好き嫌いを生み出しながら、自己中心的に生活しています。宗祖は、自らをも含めて、そのような自分勝手な生き方しかできないまま人生を終えていく私たちのありのままの姿を、煩悩具足の凡夫、と呼ばれます。それはアミダさまの智慧と慈悲に、ほんの少しでも触れることで、初めて気づかされる真実の自己の姿なのです。凡夫の集合体によって成り立っているこの世間に、真実はおろか完全なものなど存在しません。アミダさまは、人間の自己中心的な性から生じるあらゆる心を、そのまま平等に受けとめ、すべての生きとし生けるものを、かけがえのない命として大切に見守ってくださっています。私たちは、自分の考えや価値観を真実だと思い込んで生きています。し



かしその判断は、私たちの都合や感情によって絶えず移ろいやすく、決して確かなものとは言えません。人生の本当の意味や真実は、自分の知恵や努力によって見い出すのではなく、アミダさまの救いのおはたらきが、お念仏となって私たちに届けられる中で、この身に深く知らされていくものなのです。私たちは、ただアミダさまの救いのおはたらきにお任せし、お念仏をいただくのみです。

ご協力ありがとうございます

坊守　佐々木ひろみ

暑い日が続いております。先日は、令和８年熊本地震が起こりました。被害に遭われた方々には心よりお見舞い申し上げます。

仏婦会員の皆様には、いつも専教寺仏教婦人会の活動に、ご理解、ご協力をいただき、ありがとうございます。皆様に納めていただいた会費により、大切なダーナ活動（ダーナ：布施。「慈しみのこころ」「支え合うこころ」「助け合うこころ」を実践するもの）として、本山を通して国内外への支援をさせていただきました。

今回は、『子どもたちの笑顔のために募金』と、『たすけあい募金』として「令和６年能登半島地震災害義援金」「ハワイ・マウイ島大規模火災災害義援金」を仏教婦人会の会費からさせていただきました。

『子どもたちの笑顔のために募金』は、浄土真宗本願寺派全国児童養護施設連絡協議会に加入している園へ送られました。６月２０日発行の本願寺新報に、受け取った子どもたちからの手紙などが載っていましたので、ここに一部を紹介させていただきます。

◆支援金をいただきありがとうございました。アルバイトを始め、お金をいただく大変さが少しずつわかるようになり、本当にありがたく感じています。支援してくださった方に、よかったと思ってもらえるように頑張っていこうと思います。

これからも、わたしたちにできることを続けていければいいなと思います。



挿絵：内村　壽美子さん

会計報告書と会費納入について

昨年度の会計報告書と、今年度の会費納入の郵便振替用紙を同封させていただきました。会費は、1,000 円です。９月１８日（金）までに振り込んでくださいますようよろしくお願いいたします。

●前住職の門信徒葬において、仏教婦人会から供花をしていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

●いつも納めてくださっている仏婦会費から、今年は記念品を用意させていただきました。記念品として、本願寺の一筆箋を同封しております。